を參照しつゝ著者自身の所見を述べてゐるのは一般概說書としは極めて穩健な立場であると思ふ。然も隨所に引用せられた文書資料等の殆どすべてが著者自身によつて採訪せられたものであること、洗石に多年實地調査に從事せる人の著であることを思はしめる。その調査旅行中の感想や所見を蒐錄した第六編を除き、爾餘の五編にはそれ〳〵その編末に簡單な內容の總括が揚げられてゐる讀者に對するもの親切であると思ふ。（四六版四八三頁、東京岩波書店發行、定價一、三〇）〔柴田〕

○滿洲國安東省輯安縣高句麗遺蹟

日滿文化協會刊

滿洲國の輯安縣といつただけでは其の地點など直ちに想ひ起さぬかも知れぬが、廣開土王の碑の所在といつたなら多數の人々は頷く筈である。平壤に遷都する以前高句麗は、三世紀にかけて、鴨綠紅中流北岸、普通に通溝と呼ばれて居る地に國都をおいた。此處が卽ち輯安縣である。明治三十八年鳥居博士が踏査され次いで、佛の故シャヴンヌ教授、我が故關野博士等が赴いて以後、約二十年間、匪賊の巢窟として全く學術的な調査の屆かなかつた處に於て、昭和十年五月壁畫のある二古墳が發見され、これに據つて再び學界の一部に異常の興味を惹くことゝなつた。本書は同年親しく此地を訪ふて遺蹟を調査された池內博士の執筆になる。其の內容は先づ通溝平野の地理的狀況を舒し、更に曾つて學界を賑はした丸都・國內兩城問題に就いて考へ、兩城同處說を以つて鐵案とする旨を强調され、次いで同平野中に存する遺蹟卽ち丸都址・丸都山城址・廣開土王碑等を略說しかくて古墳のことに及び其の構造を述べ、石塚と土塚の二種あることを擧げ、「角抵塚」「舞踊塚」と命名したもの等新發見の壁畫古墳を紹介され、最後に石塚と土塚との年代觀と陵墓の比定とに及んで居る。

本書には猶北平淸華大學教授錢稻孫氏の譯文と三十三葉の圖版を輯めて居る。本文は要領よくまとめられては居るが著者自らも云はれる如く簡略の憾がないではない。然しこれはやがて發刊される可き詳細な報告書に期待することゝし、三十三葉の圖版と共に「大いに學界を益する」ものとして薦め度い。無慮數萬と稱せられる古墳群の寫眞を一見するならば、恐らく何人も古墳調査の興味が已に樂浪から輯安へ遷りつゝあるのを感ぜざるを得ないであらう。又、角抵や舞踊その他の壁畫を通じて高句麗人の風俗や生活を窺ふことが出來るとすれば、四神や唐草文等の壁畫を通じては六朝文化との關係が推測される。日滿文化協會の刊行物としては蓋し適宜なものである。但し本文の飜譯に就いては譯文の如何は問題外として、譯者は滿洲國人であつて欲しかつた。菊版、座右寶刊行會發賣。（小野）

○西洋法制史講義

——獨逸私法史——

西本　穎著

本書は、本學法學部に於て西洋法制史を講ぜらるゝ西本助教授の近業であつて、著者自ら本書の冒頭に云はれる如く「西洋法制